園のおたより

第　１　号

令和６年４月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

だんごむし２

園長　関　由起子

新入園児の保護者の皆様、園長の関と申します。私は昨年度の４月に大学より赴任し、この１年間、教職員のみならず、こどもたちと保護者の皆様に支えられ、過ごして参りました。専門は保健学・看護学であり、保育や幼児教育は素人でございます。自分のこどもの子育ては保育園にすべてお任せしておりましたので、幼稚園でのこどもたちの姿は私にとって驚きと感動ばかりでした。ここでは、保育の素人の私が、こどもたちとの素敵な出来事を、時に自分の子育てを振り返りながら、皆様にお伝えできたらと思っております。皆様、今年度も雑文にお付き合いいただけますと幸いです。

さて、４月を迎え、あっという間に春を通り越し夏を迎えたようです。園の芝生もすっかり生えそろい、草木の葉や花も真っ盛りです。そして、春といえば “だんごむし”。今年度もだんごむし真っ盛りです。本文のタイトルが“２”である理由は、昨年度の４月もタイトルが“だんごむし”だったからです。昨年度、幼稚園でこどもから初めて声を掛けられ喜んで行ったところ、だんごむしを見せてもらいました。この１年間で虫との出会いに大分慣れてきたつもりでいましたが、少しだけ虫が苦手な私にとって、だんごむしはやっぱり怖い。私のこわばった顔を見た３組のＡさんが、「だんごむし嫌いなの？さわってごらん、かわいいよ」と私の手に乗せようとしてくれました。確かに、何の危害も加えない、触ると丸くなりしばらくすると動き出すおもしろい丸い虫をなぜこんなに怖がるのか、私自身もわかりません。すでに成人した娘も、保育園児のときに大量のだんごむしを紙コップに入れて保育士さんを驚かせていたので、先日今も好きかどうか聞いてみました。一言「今も好きなわけ無いでしょ」とそっけない返事。こどもたちにとってだんごむしはヒーローだけれども、一部の虫好き（教育学部のＢ先生によると、とても虫好きのことを“虫屋”というそうです）を除き、おとなになると苦手になるんだと少し安心しました。

こどもたちが夢中でだんごむしを捕まえているときの目はキラキラしていて、とても素敵です。あれ、この目をどこかで見たことがあると考えてみたところ、理科や社会分野の大学の先生方に専門の内容を尋ねた時の、あの先生方の目と一緒です。Ｃ先生はカブトムシの話を、Ｄ先生は織田信長の話を、教育学部棟の前で何十分も話をしてくれました（お互いに授業があり、泣く泣く話が中断となりました）。だんごむしを捕まえているこどもたちの目が大好きであることを発見したので、私も少し、だんごむしとお近づきになれることを今年度の目標としました。だんごむしを手のひらに載せるのはとても難しいので、１段階目は人差し指で“ツン”と触ることにし、無事に１段階目をクリアしました。１年後にどの程度私が成長しているのか、今から楽しみです。

こどもが見ている世界

副園長　小谷　宜路

今年度がスタートし、春の毎日が過ぎています。先日、穏やかな陽気を感じながら園庭に出ると、ジャングルの上を空からパトロールしている人に出会いました。近くに危ないことがないか、毎日見てくれているとのことでした。次の日、今度は、綺麗なお花を咲かせることのできるステッキを持った妖精に出会いました。園庭の花々は、この妖精が咲かせたのだと教えてもらいました。そのまた次の日には、おばけのプリンセスに出会いました。秘密の隠れ家のようなところに住んでいるようでした。

さて、ここまで出会った人たちは、幼稚園のこどもたちです。遊びの中では、自由自在にいろいろな人になり、いろいろな場所へ行き、いろいろな出来事を起こしているこどもたち。空を飛び回り、花を一面に咲かせ、素敵に隠れることもできます。大人になってしまった者からすると、それは「架空の世界」「イメージの世界」となるのかもしれませんが、今、こども期を過ごしている人たちにとっては、とても豊かな「ほんとうの世界」なのだと思います。

少し昔のものになりますが、次のような文章があります。幼児教育の発展に大きな影響を与えた倉橋惣三さんが書かれた『うしろ向き』という題の著作です。

“わたしが子どもをじっと見るのは、そのうしろ向きだ。まえ向きに相対しては、笑み交わすか、話しあうか、手をとりあうか、戯れに争う形をとるか、なににしても相互いの交渉であって、じっと見る暇も隙も隔てもない。ただ、うしろ向きだけは、心をこめて眺めることが出来る。（略）せめては横顔をと思うが、いいえいいえ、そっと、しかし、じっと、うしろから眺めさせて貰っておこう。そこでは、子どもの心の動きに、ただ同じ方向にのみ追随していることも出来るのであるし。”（『幼児の教育』1938 年 12 月号）

幼稚園の毎日でこどもたちが見ている世界、それを遮ることなく、一緒に見ることができたら、どんなに楽しいかと感じます。様々な見方が染みついてしまった今では、なかなかこどもたちの見ている世界を、同じように見ることはできませんが、こどもたちの心の動きを感じ取りながら、一緒に園生活を送っていきたいと思います。

クラスだより

１くみ

「初めての出会い」

幼稚園での新しい生活が始まり 3 週間程が経ちました。緊張した様子で幼稚園に来ていた人たちも、「おはよう」と笑顔で保育室までの道のりを一生懸命に歩いてきています。

ある日、大事そうに手を握り締めて登園してくる人がいました。「先生、プレゼントがあるんだよ」と手の平を開くとそこには、小さな赤い実が一つ入っていました。「幼稚園に来る時に見つけたんだ」と素敵な物を見つけたことを嬉しそうに話してくれました。テラスで赤い実について話していると、「先生、見てー」とまた別の人が手に何かを持ってやってきました。その人の指先をよく見てみると、そこにはダンゴムシがいました。「なに見てるの」と、あっという間にダンゴムシの周りにみんなが集まってきました。指で触ってみたり、転がしてお腹側の様子を覗いてみたり、幼稚園で初めて見つけたダンゴムシとの出会いに目をキラキラと輝かせていました。そこで、園庭でダンゴムシを探してみることにしました。花壇のレンガの下やビールケースの裏、ベンチの下など、3 組に「ここにいるんだよ」と教えてもらった場所をみんなで一つ一つ探していきました。物を動かして地面をよく見てみると、「いた！」「こっちにたくさんいた！」とたくさんのダンゴムシが見つかりました。タライの中に入れてじっと様子を見ている人、砂場に穴を掘ってダンゴムシの家を作る人、別の場所を探してみる人など、一匹のダンゴムシとの出会いからこどもたちの世界が広がっていったように感じました。

広い世界の中から見つけた一つ一つの物はこどもたちにとって宝物であり、大発見なんだと改めて感じ、その気持ちを教えてくれたことを嬉しく思いました。幼稚園には、芝生やタンポポといった自然の物や大きなこいのぼりなどこどもたちが初めて出会う物が他にもたくさんあるのではないかと思います。一人一人がその時に感じた気持ちに寄り添いながら、幼稚園でのいろいろな出会いを大切にしていきたいと思います。

２くみ

「色の力」

新しい一年が始まっておよそ１カ月、緊張がほどけてきつつあり、楽しいことを積み重ねています。登園の時に「せんせい、さっきね、バナナ食べてきたよ」「さっきね、オレンジのお花を見つけたよ」といろいろなことを話してくれます。嬉しい気持ちで一日が始まりとてもしあわせです。

さて、幼稚園にも屋根より高いこいのぼりが泳ぎ始めた時に、「せんせい、２組さんでも作ろうよ」という人たちの声から、こいのぼり作りが始まりました。好きな色の紙や絵の具、紙テープの色を自分で選んで作りました。真鯉の上を泳ぐ吹き流しは「青（緑）、赤、黄、白、黒（紫）」の五色が使われています。これは「五行」に基づいていると聴きました。「木、火、土、金、水」を意味しているそうです。自然のエネルギーを色にして表しているのでしょう。豊かさを表しているようにも感じます。

４月生まれの人のお誕生会では、インタビューをしました。「どんな色がすき？」と尋ねてみると、「しろ」「あか」「ピンク」。それは、やさしい色、かわいい色、あったかい色だから・・と教えてくれました。

遊びの時には、「この色のシャベルがいい」「〇〇さんと同じ色のシャベルを使いたい」という思いもあるようです。どれもシャベルなので同じ物なのですが、こどもたちには全く違う物のように映るのでしょう。その人にしか分からない思いを大切にしたいですね。これから友達と遊んだ楽しい思いなどを経験する中で、好きな色や選ぶ色が変わってくることもあるかと思います。好みの移り変わりや、「好き」のこだわりを、これからの毎日で見せてもらえることも、その人を知ることにつながると思っています。

ちなみにわたしも、元気を出したい時、やさしい気持ちになりたい時、「好き」でいっぱいにしたい時など、選ぶ色でその時の自分の心が分かる気がしています。季節によっても変わってきますが、色の力を借りるのです。自分の人生を彩り豊かにデザインしたいものです。

みなさんの好きな色は何ですか？

３くみ

「今日も一緒に、明日も一緒に」

３組に進級して１か月が経とうとしています。保育室や担任、さまざまな環境が変化している中で、こどもたちは楽しみな気持ちと少しの不安な気持ちと一緒に過ごした１か月でした。周りの環境の変化は大きいですが、クラスの友達が変わらず、同じ２７人で過ごすことに安心している人もいるようです。

同じ人と継続的な関わりがあるからこそできる遊びがあります。快晴で春の陽気が心地よいある日、二人の人が自然と遊びの中で一緒になって、チョコレート作りのイメージで遊んでいました。最初は声を掛け合ったわけではなく、近くで遊んでいるうちに自然とイメージが混ざり合って一緒に遊び始めたようです。二人はトレイに土を砕いていれ、そこに水を入れてよく混ぜ“冷蔵庫”に入れました。遊びの時間の殆どを二人で過ごしていました。次の日、遊んでいたうちの一人が「今日も〇〇ちゃんとチョコレート作るんだ」と、朝登園したときに“冷蔵庫”の様子を見に行く姿がありました。「〇〇ちゃんと」という部分が話していた人にとってはとても大切なことなんだろうなと感じました。チョコレートを作るのが楽しかったのではなく、「〇〇ちゃんと」チョコレートを作ることが楽しかったのではないかと思います。

二人のように、気の知れた友達だからこそ、始まっていく遊びが３組では多いです。一緒にいることが楽しいから始まる遊びもあれば、「この人のしている遊びなら面白いはず」というように興味をもって関わることで始まる遊びもあります。変化が大きいこの時期、変わらないことに安心したり、生活が楽しい気持ちにつながったりすることがあるかと思います。この２７人だからこそできることを今年はたくさんしていきたいと思います。